

秋は夕暮れ、とかつでしたためた歌人がいた。千年の時を経ても、黄昏時、赤く染まつた空とねぐらに帰る鳥を見て、胸に迫り来る感情は変わらない。ビルに囲まれた東京の空をひとり見上げ、学生時代、共に帰路につく友人たちと何度も見た、あの茜色の空を思い出す。文化祭での演劇発表の準備のため、友人たちと試行錯誤しながら、道具作りや稽古に夢中で取り組んだこと。質問に行ったついでに少し、のつもりだった先生との雑談が、思いがけず長引いて人生相談にまで発展したこと。そうやって、下校時刻ギリギリまで残った日の帰り道、三十三間堂と京都国立博物館の間を抜け、京都駅に向かへゆるやかに伸びる七条通を下った先には、高い建物の少なく広々とした空を背に、灯台を模して造られたという京都タワーが、夕日を受けて赤々と光っている。

学校で過ごした充実した日々の記憶は、こんなふうに夕焼けと強く結びついていて、綺麗な夕焼けを見るたびに鮮やかに蘇り、じんわりと心があたたかくなる。就職のため上京して一年半、自身の至らなさに落ち込むことも多々あるが、かつて恩師や友人がくれた言葉や、勉強や行事に打ち込む中で得た自己効力感は、月日が流れてもなお熱を湛え、私の背中を押してくれる。そして同時に、私がなぜ文科省で働きたいと思ったのか、ということについて、改めて思い起こさせてくれるのである。

家庭に少し居づらさを覚えていた思春期の私にとって、先生や友人は心の拠りどころ、学校はかけがえのない「居場所」となっていた。だから今度は、自分が「居場所」を提供する側になりたい、と思った。学校の中だけではなくいい。自身にとって拠りどころとなるような、大人や先輩、友人と出会えれば、その存在そのものが彼らにとって「居場所」となる。仮に遠く離れてしまったとしても、心の中で自身を支えてくれる「居場所」であってくれる。こうした「居場所」と巡り合える機会ができるだけ多くつくるためにはどうすればいいか。そして、勉強や部活、趣味など、何かひとつでも、一生懸命取り組みたいと思える対象に出会い、打ち込める環境をつくるにはどうすればいいか。学校での働き方や学び方など、変えていけることはきっとたくさんある。教育の現場が抱える様々な課題に対し、あらゆる側面から一体的にアプローチできるところに魅力を感じ、入省を決めた。

秋の夕暮れ、郷愁の念とともに脳裏に浮かぶ、赤々と光る京都タワーの姿は、進みたいと決めた道を思い出させてくれる。やらねばならないことの多さに押しつぶされそうになり、寄る辺のない気持ちになったとき、私を支え、後押してくれる存在が心の中にあることを思い出し、彼らからもらった言葉や経験を燃料に、前を向いて進んでいきたい。

(N.S)